

株主のみなさまへ

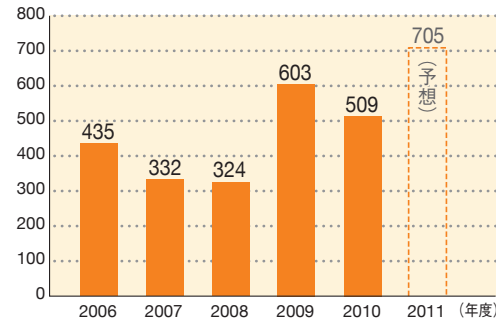
第13期報告書

2010年4月1日～2011年3月31日

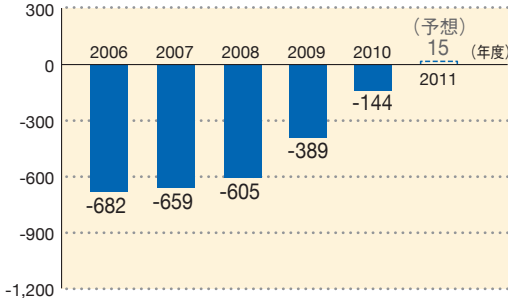
株式会社トランスジェニック 証券コード2342

連結決算ハイライト

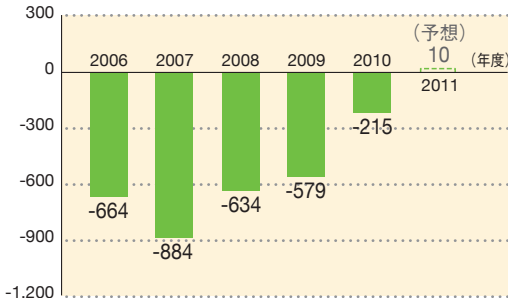
▼売上高(単位:百万円)



▼経常損益(単位:百万円)



▼当期純損益(単位:百万円)



●概況

当社は、平成23年3月期において、前期に引き続き更なる収益基盤の確立を目指した業務の効率化およびコスト削減を行いました。その結果、当連結会計年度における当社グループの業績は、売上高509百万円(前期603百万円)、営業損失133百万円(前期385百万円)、経常損失144百万円(前期389百万円)となりました。しかしながら、連結子会社である株式会社プライミュンにかかるのれんの一括償却額165百万円を特別損失として計上し、当期純損失は215百万円(前期579百万円)となりました。

また、当連結会計年度より、遺伝子破壊マウス事業、抗体事業、試薬販売事業を事業セグメントとしました。セグメント別業績状況は、遺伝子破壊マウス事業においては、遺伝子情報売上(TG Resource Bank®)及びDNA解析等の新規サービスが順調に推移し、売上高306百万円(※前期232百万円)で増加となりました。しかしながら、受託事業の生産効率化が当初計画より遅れたことなどから、営業利益54百万円(前期51百万円)となりました。抗体事業においては、受託サービスの受注が計画を下回ったものの、抗体製品販売が好調であったことから、売上高77百万円(前期55百万円)となりました。また、新抗体製品の開発戦略において、自社開発から共同研究へシフトし、開発活動の効率化に努めた結果、営業利益は6百万円(前期は営業損失95百万円)と大幅に改善しました。試薬販売事業においては、輸入試薬販売およびサイトカイン販売が好調であったことから、売上高124百万円(前期94百万円)、営業利益22百万円(前期は営業損失2百万円)となりました。

※前期の数値は、新セグメント区分により再作成したものであります。

ご挨拶

株主の皆様には、平素よりご指導、ご支援を賜り厚く御礼申し上げます。さて、第13期の事業報告書をお届けするにあたり、ご挨拶申し上げます。

当社は生命資源の開発を通じて社会に貢献する企業を目指しております。この目標を達成するために、今後も遺伝子破壊マウス事業における開発体制の拡充、抗体事業におきましては当社が保有する知的財産の事業化を推進すると同時に、当社にとって有益な各研究機関・企業との様々な提携強化を図ります。

当社はこれらの重点施策に全社員一丸となって取り組み、社会的貢献度の高い企業へ成長し続けることで、企業価値のさらなる向上を実現させる所存です。

株主のみなさまにおかれましては、当社の取り組みに何卒ご理解をいただき、なお、一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2011年6月 代表取締役社長
福永 健司



Profile 略歴

1969年 8月 13日生まれ
1993年10月 有限責任監査法人トーマツ入所
2003年 5月 トーマツ・ベンチャーサポート株式会社取締役
2009年 6月 株式会社トランスジェニック取締役
2010年 6月 株式会社トランスジェニック代表取締役社長 現任

Contents 目次

連結決算ハイライト	1	事業のご紹介	5	会社概要	11
ご挨拶	2	研究開発のご紹介	7	株式の状況	11
トップインタビュー	3	知的財産戦略	8	株主メモ	11
		連結財務諸表	10	IRからのお知らせ	11

Q1. 平成23年3月期業績総括についてお聞かせください。

期首に掲げた主力3事業への経営資源の注力が功を奏し、収益基盤の強化は着実に進んでいます。売上高については509百万円と前期603百万円と比較しますと、表面上は減収となっていますが、前期末に廃止を意思決定した食品事業（同事業前期売上高221百万円）を除外した実質ベースでは前期比33%の増収を達成しています。また、損益面については当該増収に加え、研究開発及び事業運営の効率化による経費削減を実施してきた結果、営業損失133百万円（前期385百万円）と前期に引き続き大幅改善を実現しています。

最終損益につきましては財務体質健全化を実現するために実施した連結子会社に係るのれんの一括償却165百万円が大きく響き当期純損失215百万円（前期579百万円）となりましたが、当該処理により、来期以降ののれん償却費負担も消滅し、当期で収益体質に向けた準備はほぼ整ったと考えています。

Q2. このたびファイナンスを実施しましたが、ファイナンス結果と今後の展開についてお聞かせください。

この度のファイナンスについては、2011年2月25日に無事終了し、この厳しい市場環境の中で10億65百万円の資金調達を実現することが出来ました。また、昨年9月のファイナンス意思決定以降に一時期、株価が低迷したことで株主の皆様にご心配をおかけしましたが、本年3月には昨年7月の高値を更新したほか、現在も意思決定時の株価を上回った状況で推移しています。これは市場が、企業価値向上を目的とした資金調達の実行という当社の意思決定を評価していただいているものと考えています。

当該資金を活用した今後の展開については、過去にもご説明しましたように、事業基盤拡大を目的とした積極的なM&A、主力マウス事業の更なる拡大を支える神戸研究所の拡充投資、及びマウス事業の新たな柱としての次世代技術開発への活用を考えています。

Q3. 株式会社免疫生物研究所と包括的業務提携を締結しましたが、目的および意義についてお聞かせください。

（株）免疫生物研究所との包括的業務提携は、前述のとおり事業基盤拡大を目的とした戦略的な提携の一つです。この厳しい経済環境の中、大手と違い経営資源に限界があるバイオベンチャーが継続的な成長・発展を遂げるためには、経営理念が共有でき、相互に事業補完が可能な企業との連携が必要だと考えています。もちろん、各社が単独で成長・発展が可能な環境であれば容易なのですが、同じような事業内容の各社が研究開発・営業・財務を独自にやっても非効率なのは明白であり、それが許容される経済環境ではないと私は考えています。（株）免疫生物研究所は、まさにこの考えに共鳴していただいた企業であり、現在、急ピッチで業務の協力体制を構築しています。

今後も、当社は上記の戦略・方針に基づき積極的に他社との提携・関係強化を進めてまいります。

Q4. 最後に、株主様へのメッセージをお願いいたします。

当年度の最終損益黒字化は実現できませんでしたが、収益基盤強化に向けて、これまで実施してきた各種施策の成果が数値上にも着実に現れています。

新年度はこれまでの過去2年間実施してきた経営改革の一つの節目として営業損益・最終損益黒字化を目標として掲げます。黒字化実現に向けた基本方針はこれまでと同様に既存事業の拡充および過去に投資を行った開発パイプライン成果の収益化を国内・海外へ展開することです。

また、研究開発型ベンチャーとして、高い技術をもつ各研究機関および企業との連携を強化し、将来の収益基盤となり得る付加価値・社会的貢献度が高いテーマに特化した研究開発を効率的に推進していきます。

以上の経営課題実現に向けて、これまで同様、積極的に取り組む所存です。

株主の皆様には何卒ご理解を賜りたくお願い申し上げます。



事業のご紹介

● 各セグメントの取り組みをご紹介いたします。

マウス事業

当社は、遺伝子破壊マウス事業において、遺伝子破壊マウス750系統および遺伝子破壊ES細胞2,000系統についての情報を保有し、当社ホームページ上の『TG Resource Bank[®]』および国立遺伝学研究所のデータベースとして公開し、独占的・非独占的使用権を供与しています。また、研究者が標的とする遺伝子を破壊したマウスの作製受託や解析等の受託などの事業を展開しております。

【主な製品・サービス】

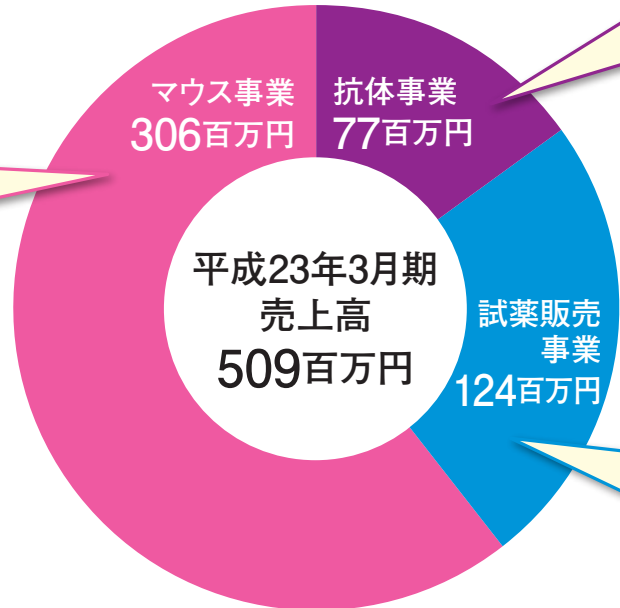
- TG Resource Bank[®] (750系統のマウス、約2,000系統のES細胞)
- 遺伝子破壊マウス作製
- 前臨床薬物評価試験
- 高密度ヒト組織マイクロアレイ



▲遺伝子破壊マウス

好調に推移

▼売上高構成



平成23年3月期
売上高
509百万円

マウス事業
306百万円

抗体事業
77百万円

試薬販売
事業
124百万円

抗体事業

当社のGANP[®]マウス技術を用いてがんや糖尿病といった市場性が期待される抗体を作製し研究用試薬として提供するとともに、各研究機関から得られたバイオマーカー候補分子情報に基づき将来の診断薬となりうる有用な抗体の研究開発を進めています。

【主な製品・サービス】

- GANP高親和性抗体作製
- モノクローナル抗体作製
- タンパク質高発現細胞作製
- 自社開発抗体製品販売



▲開発抗体製品

好調に推移

試薬販売事業

研究者のニーズが高い研究用試薬の販売(輸入抗体製品、サイトカイン)および情報提供を展開しています。現在、当社の取扱品目数は、25,000種類です。今後も、サイトカインを含めた研究用試薬の拡充につとめ、ライフサイエンスの支援をしてまいります。

【主な製品・サービス】

- 研究用抗体製品の輸入販売
- 再生医療研究用サイトカイン
- がん免疫細胞療法研究用サイトカイン



▲研究用試薬

好調に推移

Technology テクノロジー

可変型遺伝子トラップ法

熊本大学生命資源研究・支援センター 教授 山村研一(当社取締役)らにより発明された、遺伝子改変マウスの効率的な作製方法であり、トラップベクターによりマウスES細胞に発現する遺伝子をランダムに完全破壊する方法です。従来のトラップ法に比べて、遺伝子の完全破壊が行えること、破壊した遺伝子の位置にヒト遺伝子や突然変異などを挿入可能であることが特徴であり、ヒト疾患モデル動物の開発や詳細な遺伝子機能解析に有用な手法です。当社は、本技術を基軸とした遺伝子破壊マウス作製技術を基幹事業としています。

ヒト化マウス

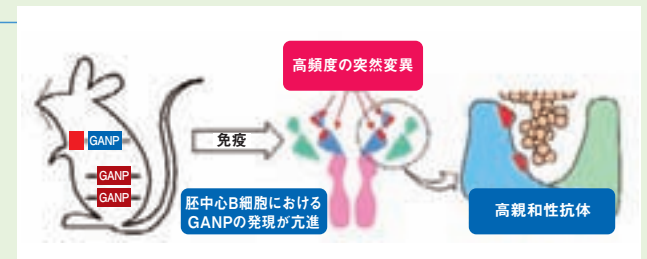
ヒト化マウスには、便宜的に遺伝子レベルでのヒト化マウス、細胞レベルでのヒト化マウス、組織・臓器レベルでのヒト化マウスの3種類があります。遺伝子レベルでのヒト化マウスは、トランスジェニック社が持つ可変型遺伝子トラップ法または可変型相同組換え法によりすでに作製可能です。細胞レベルでのヒト化マウスの例としては、ヒト白血球を持つマウス、ヒト抗体を産生するマウスがあげられます。本共同研究で

目指すのは、組織・臓器レベルでのヒト化マウスでマウスの生体内で正常にヒト組織や臓器を再構築し、持続的に機能をさせ、ヒトの細胞や組織が拒絶されることなく体内に存在するマウスです。例えば、ヒト肝臓を持つマウスなどがあります。このようなヒト化マウスを用いることにより、非臨床試験(新薬の安全性テスト)や創薬研究がよりヒトの状態を反映したモデルで進めることが可能となります。

GANP[®]マウス技術

GANP (Germinal Center Associated Nuclear Protein)とは、熊本大学 阪口薫雄教授らにより発見された遺伝子で、抗体を産生するB細胞で発現しています。GANP[®]マウス技術とは、このGANP遺伝子を過剰に発現させたGANP[®]マウスを用いて抗体を作製する技術です。GANP[®]マウスで得られる抗体は、親和性や特異

性の高いことが特徴で、診断薬や抗体医薬の開発への展開が可能です。当社は、本技術による抗体の自社製品開発、および本技術のライセンス供与を行い、抗体事業収益の柱としております。



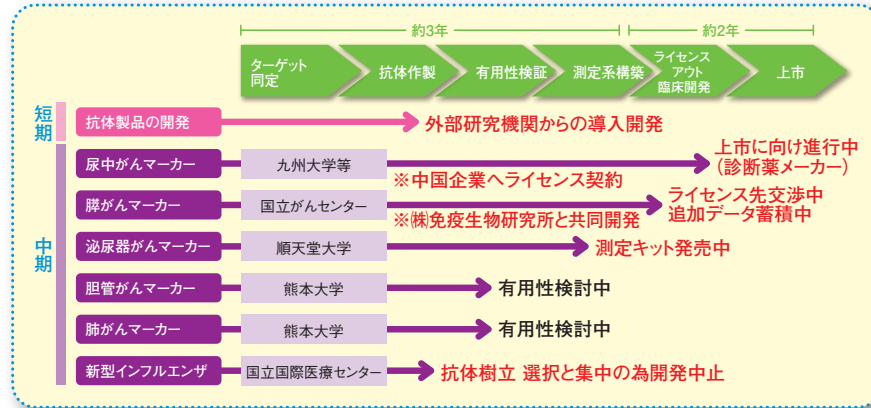
研究開発のご紹介

● 研究開発基本方針

研究開発テーマについては、収益基盤の早期確立を目指すため、選択と集中を基本に絞り込みを行って参りました。今後は選択と集中を進める中で、マウス事業における、熊本大学との「ヒト化マウス」の共同研究、さらに抗体事業におけるシーズ探索の拡充の一環としてハルピン医科大学との共同研究開始、(株)免疫生物研究所との膵がんマーカーの診断薬応用に向けた共同開発と、将来的な収益化につながるプロジェクトに経営資源を投入します。

● 研究開発パイプラインの進捗状況

当社は、GANP[®]マウス技術を用いて作製した抗体を様々なバイオマーカーとして診断薬へ展開するよう研究開発を進めております。バイオマーカー開発パイプラインの充実を図ることで、抗体事業のブランド力を高めて参ります。



● 研究開発トピックス

2010年 4月	「GANP [®] マウス技術」の高親和性抗体製造方法に関する特許が日本にて成立 尿サンプルによる癌診断の測定系に関する特許が米国にて成立	12月	「トラップマウス技術」に関する特許が香港にて成立 国立大学法人熊本大学との共同研究契約締結に関するお知らせ
6月	「トラップマウス技術」に関する特許が中国にて成立	2011年 2月	タンパク質高発現系技術に関する特許出願について 「トラップマウス技術」に関する特許が日本にて成立
9月	タンパク質高発現細胞作製サービス開始のお知らせ	3月	株式会社免疫生物研究所との包括的業務提携に関するお知らせ
10月	ハルピン医科大学との共同研究契約締結のお知らせ	4月	「GANP [®] マウス技術」に関する特許が米国にて成立 新規膵臓がんマーカーの診断応用に向けた共同研究に関するお知らせ
11月	早期癌マーカーとしてのジアセチルスベルミンに関する特許が国内で成立		

知的財産戦略

※2011年より知的財産報告書は、事業報告書に統合いたしました。

● 知的財産戦略の方針

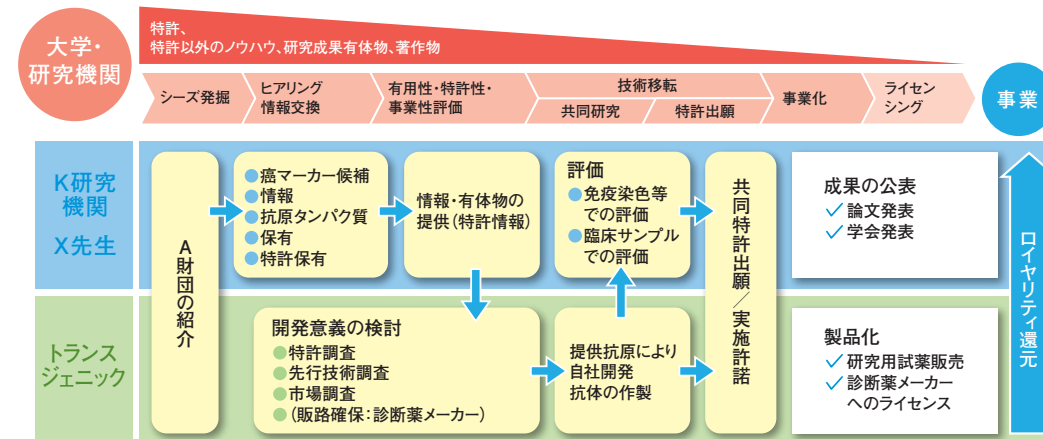
当社は、創薬ターゲットを探索している製薬企業や疾病の解明に取り組む研究者へ、有益な研究ツール、技術情報、知的財産を提供することにより、創薬および病態解明に貢献したいと考えております。

また、当社は、大学・研究機関等との共同研究を積極的に行い、当社事業とシナジー効果が発揮でき得る技術を、研究開発の早期段階において導入することに努めております。研究開発の早期段階での技術導入により、その技術が公開される前に確実な知的財産権を確保するとともに、豊富な実験データに裏付けられた強い特許、将来のマーケティングを見据

えた特許網を構築すべく、研究開発、事業戦略と融合させた特許戦略を展開しております。さらに、導入した技術を付加価値の高い技術や知的財産に育て、これらの技術から生まれた独自性の強い製品・サービスを提供するとともに、知的財産、技術情報のライセンスビジネスを展開しております。知的財産のライセンスについては、製薬企業、診断薬メーカーなどの開発・事業のステージにあわせたマイルストーンを設定することにより、複数の事業ドメインを対象としたハブアンドスポークモデル型のライセンス契約とするなど、戦略的な知的財産の活用に取り組んでおります。

● 特許・ライセンスの事業への貢献

当社特許の事業への貢献度は高く、当社は保有特許の極めて高い実施率を保っております。また、積極的なライセンスイン、ライセンスアウトを通じて、直接的な収入の増加のみならず、事業の優位性を図り、将来を見据えた中長期的な知的財産戦略を実行しております。



事業戦略、研究開発戦略、知的財産戦略の横断的な取り組み

当社は、研究開発および知的財産体制として、研究開発部、経営企画部を設けております。

研究開発部は、マウス作製受託、抗体作製受託とともに、新規技術導入、新規腫瘍マーカーの開発を目的とした研究開発を進めております。

経営企画部は、営業グループを中心に営業活動を行うとともに、知的財産およびライセンスを管理するグループからなり、知的財産戦略の策定・実行から自社で創出された技術の権利化や活用、さらに他社の技術動向の調査や侵害の有無、技術提携や知的財産の戦略的な導入等、知的財産に関する

業務全般も扱っております。また、社内での知的財産教育にも努めており、社内各部署への自社・他社の知的財産関連情報の発信、戦略的な知的財産の取得を目指した研究開発の指針などの提起を行っています。

当社のようなベンチャー企業にとっては、国内外の大学などの学術機関や製薬企業などとの連携が極めて重要となります。当社は、知的戦略部門を中心に、大学・研究機関の知財部等から積極的に技術導入やライセンスを受けると同時に、製薬企業や委託企業などとの業務提携や技術提供を行い、当社事業の拡大・強化に努めています。

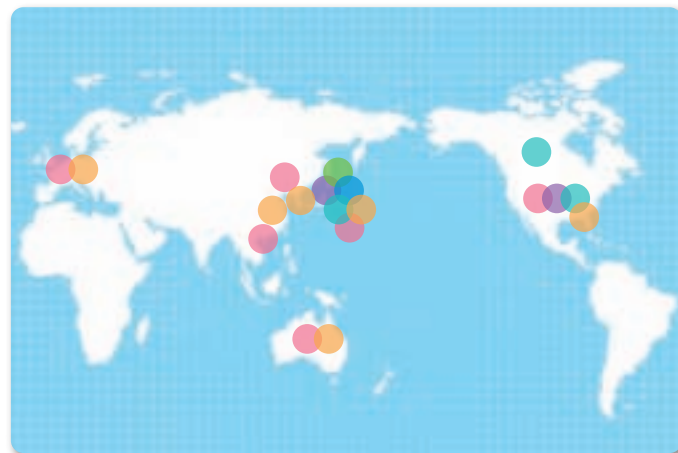
リスク対応情報

2011年3月末時点において、当社に対する特許訴訟やクレームはありません。当社は、自社知的財産の管理・運営のみならず、他社知的財産の調査・監視を徹底しております。新たな研究開発を開始する前には、特許事務所等へ特許調査を依頼し、自社技術が他社の特許侵害に当たらぬよう、リスクマネジメントに努めております。

主な特許成立マップ

トランスジェニック社の特許群は、トラップ技術関連、GANP[®]マウス技術関連、腫瘍マーカーなど、事業の根幹となっております。これらの知的財産をもとに、国内外の複数の企業とライセンス契約を積極的に進めてまいります。

- トラップ法関連特許 米国、欧州、豪州、中国、香港、日本
- 尿中がんマーカー(ジアセチルスヘルミン)特許 日本、米国
- 早期がんマーカー(ジアセチルスヘルミン)特許 日本
- 膵がんマーカー特許 日本
- GANP[®]タンパク質特許 日本、米国、カナダ
- GANP[®]マウス関連特許 日本、欧州、中国、韓国、豪州、米国



連結財務諸表

連結貸借対照表

(単位:千円)

	前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
(資産の部)		
流動資産	1,194,115	2,221,852
固定資産	610,461	387,117
資産合計	1,804,576	2,608,969
(負債の部)		
流動負債	158,333	137,598
固定負債	115,202	20,673
負債合計	273,535	158,271
(純資産の部)		
株主資本	1,516,218	2,437,018
資本金	4,855,225	5,404,211
資本剰余金	—	546,691
利益剰余金	△3,337,224	△3,512,101
自己株式	△1,782	△1,782
その他の包括利益累計額	717	1,440
新株予約権	10,537	8,348
少数株主持分	3,567	3,890
純資産合計	1,531,040	2,450,697
負債純資産合計	1,804,576	2,608,969

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:千円)

	前連結会計年度 (自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	△308,670	△183,366
投資活動によるキャッシュ・フロー	△728,157	696,743
財務活動によるキャッシュ・フロー	△36,300	1,075,952
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	△1,073,129	1,589,328
現金及び現金同等物の期首残高	1,378,300	446,357
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	141,185	—
連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額	—	△42,560
現金及び現金同等物の期末残高	446,357	1,993,125

連結損益計算書及び連結包括利益計算書

(連結損益計算書)

(単位:千円)

	前連結会計年度 (自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)
売上高	603,985	509,100
売上原価	373,210	271,666
販売費及び一般管理費	615,977	370,595
営業損失(△)	△385,201	△133,161
営業外収益	17,699	4,927
営業外費用	22,101	16,053
経常損失(△)	△389,603	△144,288
特別利益	11,164	106,250
特別損失	242,970	169,052
税金等調整前当期純損失(△)	△621,409	△207,091
法人税、住民税及び事業税	4,928	3,369
法人税等調整額	—	4,689
少数株主損益調整前当期純損失(△)	—	△215,150
少数株主利益又は少数株主損失(△)	△47,303	323
当期純損失(△)	△579,034	△215,474

(連結包括利益計算書)

(単位:千円)

	前連結会計年度 (自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)
少数株主損益調整前当期純損失(△)	—	△215,150
その他の包括利益	—	722
包括利益	—	△214,427
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	—	△214,751
少数株主に係る包括利益	—	323

● 会社概要 2011年3月31日現在

会社名	株式会社トランスジェニック
設立	1998年4月
資本金	5,404百万円
従業員数	29名
事業所	
本社	熊本市南熊本三丁目14番3号
神戸研究所	神戸市中央区港島南町七丁目1番地14
東京オフィス	東京都千代田区霞が関三丁目7番1号

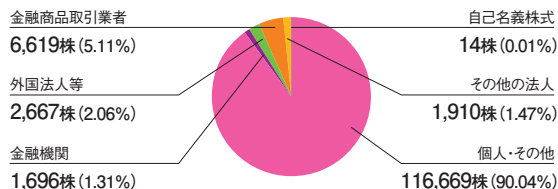
● 株式の状況 2011年3月31日現在

発行可能株式総数	436,301株
発行済株式の総数	129,575株
株主数	13,541名

大株主の状況

株主名	持株数(株)	持株比率(%)
野村證券株式会社 野村ジョイ	2,176	1.67
日本生命保険相互会社	1,350	1.04
大和証券株式会社	1,296	1.00
上永 智臣	981	0.75
野村證券株式会社	812	0.62
チェース マンハッタン バンク ジーティーエス クライアント アカウント エスクロウ	810	0.62
佐賀 芳行	800	0.61
松浦 正厚	800	0.61
中村 英幸	722	0.55
坂本 佐兵衛	700	0.54

所有者別株式分布状況



● 役員 2011年3月31日現在

代表取締役社長	福永 健司	常勤監査役	増岡 通夫
取締役	山村 研一	監査役	遠藤 了
取締役	坂本 珠美	監査役	佐藤 貴夫
取締役	能勢 博		

● 株主メモ

証券コード	2342
上場市場	東京証券取引所 マザーズ
上場年月日	2002年12月10日
事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	毎年6月
基準日	定時株主総会・期末配当 毎年3月31日 中間配当 毎年9月30日

株主名簿管理人 三菱UFJ信託銀行株式会社
特別口座の口座管理機関

同連絡先 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
〒137-8081 東京都江東区東砂七丁目10番11号
TEL:0120-232-711 (通話料無料)

公告方法 電子公告(当社ホームページに掲載)

※事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。

IRからのお知らせ

当社のホームページがリニューアルいたしました(2010年9月17日より)。最新トピックスやホームページの更新情報などを電子メールでお知らせしています。ご登録は当社ホームページにて受け付けています。

<http://www.transgenic.co.jp>



当社のIR活動についてご意見・ご感想をお聴かせください。
下記アドレスへのご連絡をお待ちしております。

ir@transgenic.co.jp

